

ウランバートル市における障害者の社会参加促進プロジェクト

ニュースレター第6号（2018年1月） 障害者リーダー本邦研修大特集!!

視線を送るだけでパソコン入力ができる！

12月18日、午後は東京都障害者IT地域支援センターを見学しました。パソコンやスマートホンを利用したい障害のある人達、またその支援者のための施設です。フロアに広がる様々な情報保障の機器を手にした研修員達は興奮。片手用のキーボードや頬で操作するマウス。中でも驚いたのは「視線入力」。センサーとアプリを使って、画面を見つめるだけでPC入力ができます。これを使えば、体を動かすことが難しい人がPCを無理なく利用することができるのです。このセンターでは、遠隔地に居住しながら勤務する障害のあるスタッフがいます。新潟県の斎藤さんは、マイクとカメラを内蔵したロボットをセンターに置いて、他のスタッフと会話したり、会議に参加しています。スカイプと違うのは、斎藤さんが自由にカメラを動かすことができること。自分で見たい方向や高さを変えており、まるで現場にいるような存在感でした。「最近では、理解や認知、記憶が困難な人達の利用が増えています」と堀込所長。パソコンからスマートホンへ。機器が時代とともに変化するように、利用者も変化しています。多様化する利用者とそのニーズに寄り添って支援している施設でした。



（視線入力パソコンを利用している様子）

群馬県の小学校を訪問

12月19日は群馬県桐生市を訪問。新里中央小学校で障害平等研修（DET）を見学するためです。今回の研修員の内、5名がDETファシリテーターとしてモンゴルで活躍中。「日本での取り組みを学びたい」、研修員の希望が叶った一日になりました。皆でモンゴルの民族衣装・デールを着て参加しました。6年生60名を対



（実際にDETを実施している様子）

象にDETを実施したのは、3名の地元のファシリテーター。わかりやすい表現や楽しいアクションを入れたり、児童向けに工夫した手法に研修員はたくさんのアイディアをもらったようでした。「これまで学校でDETを行ってからの変化は？」、意見交換会では、研修員からの質問に、校長先生や障害のある子どもの親達が丁寧に答えてくれました。「障害のある子ども達に対する先生や生徒の態度が変わった」、成果を確認した研修員は、子どもの頃から障害について理解することが大切と実感していました。



地元のファシリテーターとの記念写真

大学生生活編



（DPUBチーフアドバイザー 千葉寿夫）

さて意気揚々とオーストラリアのウーロンゴン大学院国際関係学部に入學した私は、第一学期で衝撃を受けました。というのも、教授の英語が分からない。英語学校の先生が如何に「標準」的な英語を話していたのか痛感させられました。大学教授は国籍も様々で、それぞれイントネーションが違う。さらに専門用語を多用するので授業にまったくついていけません。さすがに「まずい」と感じ、担当教授に相談しチューターをつけてもらうことにしました。さらに、自分は専門性がないからと説明すると、「じゃ、1年半勉強すれば？」と勝手に就学期間を伸ばしてくれました。授業に全然ついていけなかった自分は「良かった〜」っと、当時は喜んだんですが、よく考えてみると、こんなに気軽に就学期間を延長するオーストラリアってなんなんだろうと思いました。ただおかげで、第一学期は1教科落としたものの2教科はパス、二学期は全教科パスと良、三学期は全教科・良で卒業することができました。これも教授の英断のおかげ（？）っと、今では感謝しています。さて卒業が近づいて来ると、次は就職ですよね。国際関係学修士だけで、簡単に国連で働けるわけないし・・・、悩んだ末、まずは国連インターンに申し込むことにしました。（つづく・・・）



JICA DPUBのFACEBOOKページに「いいね」をお願いします。

お陰様で、今ではページのいいねが1022件に達成し、より多くの方に情報を発信できるようになりました。これからも、楽しんでいただけるような投稿を目指して頑張ります。引き続き、宜しくお願い致します。

モンゴルのDET、世界一の拡がり



(DETのデモを行っているファシリテーター)

12月22日、障害平等研修（DET）ファシリテーターの5名は、朝から落ち着かない様子でした。日本研修が始まって2週間、最後の科目であるこの日は「DETフォローアップ」。1年ぶりにDETトレーナーの久野先生との再会です。懐かしくて嬉しい一方で、久野バクシ（先生）の前でDETのデモをする緊張感で一杯でした。「普段どおりにできなかった・・・」と悔しがる研修員達。「各演習の目的を明確に伝えること。何を考えるためにこの演習をするか。何を発見してもらうか。」、久野バクシはこうした指導に加え、「モンゴルは世界で最も速いスピードでDETが拡がっている、皆さんの活躍は素晴らしい！」と激励して下さいました。デモの後は、日本のDETフォーラム事務局の方々との意見交換。副事務局長の長島さんから組織運営、理事の楠目さんからファシリテーターの育成についてお話を伺うことができました。日本でも一部のファシリテーターは稼働していない、モンゴルと同じ課題を聞き、深く頷く研修員達。「ファシリテーターが独自でDETを行った場合、フォーラムに収益の一部を支払ってますか？」など、切実な質問も。ファシリテーターで立ち上げたばかりの「DETフォーラム・モンゴル」は、日本の経験を参考に自立した組織運営を目指しています。

自分で選ぶ、自分で決める。自立生活。



(講義の様子)

12月21日、朝から東京都八王子市に向かいました。目的はヒューマンケア協会。日本で自立生活センターを立ち上げた中西先生の講義が目的です。まずは研修員の自己紹介から。ほとんどが障害のある人達で構成している今回のメンバーに、中西先生は興味を持って下さった様子。中でも最も障害の重い研修員には、先生からたくさんの質問をしていました。モンゴルの自立生活センターで働いている研修員は、「日本の自立生活の父」に会えて感激していました。「当時は、リハビリが終わると、施設に入るか親の所に帰るしかなかった。自分のことを自分で決められない生活だ」と自立生活センター設立の経緯を語る先生。モンゴルで自立生活を進めるには、介助サービスを充実させることが必要、と助言して下さいました。「2時間かけて服を着るのではなく、人の手を借りて自分が望む生活をする」、自立生活を学んだ研修員達。重度の障害のある人から始めることが重要、そうすればすべての人に対応できる、という先生の考え方はまさに目からうろこが落ちるような発見でした。

ハートバッジの会

知的障害や発達障害といった目に見えない障害。どうやって支援をしたり、受けたりすることができるのでしょうか。障害平等研修（DET）サポーターの有家さんは、車椅子や白い杖のようなひと目でわかる障害と違って、



(ハートバッジ)

わかりにくい障害を持つ人が、周囲に理解してもらう方法を考えました。それが「ハートバッジ」です。バッジ種類。文字がある方は当事者、ない方は支援者です。「目に見えない障害を持っています」と、「応援します」というサイン。車椅子マークやレッドリボンのように、シンボル化することで周囲への障害の理解を広めています。有家さんのお子さんが描いたハートのイラストのバッジ

リーダーになって頑張れ

研修最終日の12月26日は、デール（民族衣装）で全員集合。2週間の学びを発表する特別な一日でした。前日のリハーサルでは、お互いの発表に意見を出し合い、皆書き直して本番を迎えました。発表会には講師の先生達も参加。就労や物理・情報アクセシビリティなど、日本の何がモンゴルの人達の



(修了証書の授与式)

の学びになったか、興味深く聴き入っていました。テムーレンさんの「駅員が電車に乗る時にスロープを出してくれるところが良かった。」という報告に対し、DPI日本会議の崔さんは、「海外では人の手を借りずに車椅子利用者が自分で電車の乗り降りができる。モンゴルでは最初から誰でも使えるように配慮した方がよい。」とアドバイス。DETフォーラムの楠目さんは、「日本でも地方に行けばまだインフラが整っていない」と実情を伝えて下さいました。ヒューマンケア協会の内山さんは、介助者とともに来場。「障害のある人が自分で選び、決めていく」という自立生活の理念を研修員達がしっかりと受け止めたことに感心。最後に「皆さん、リーダーになって頑張ってください！」とエールを贈って下さいました。

Office: Government Building – 2, United Nation's Street – 5, Ministry of Labor and Social Protection Ulaanbaatar – 15160, Mongolia

Facebook: <https://www.facebook.com/jicadpub>

Website: <https://www.jica.go.jp/project/mongolia/015/index.html>